

## 公立学校と住民主導まちづくり組織の協働による 地域交流施設の管理と地域づくりのデザイン

-兵庫県播磨町での取り組みを通して-

### DESIGN OF COMMUNITY DEVELOPMENT AND FACILITY UTILIZATION ON COLLABORATION OF LOCAL COMMUNITIES In case of Harima Town, Hyogo Pref.

倉知 徹 芸術工学研究所特別研究員

川北 健雄 デザイン学部環境・建築デザイン学科 教授

佐々木 宏幸 デザイン学部環境・建築デザイン学科 特別准教授

相良 二郎 デザイン学部プロダクトデザイン学科 教授

Tohru KURACHI Research Institute of Arts and Design, Research Fellow

Takeo KAWAKITA Department of Environmental Design, School of Design, Professor

Hiroyuki SASAKI Department of Environmental Design, School of Design, Special Associate Professor

Jiro SAGARA Department of Product Design, School of Design, Professor

#### 要旨

本稿は、身近な生活環境における地域住民主体のまちづくりにおいて、多様な立場の地域住民が連携・協働するための相互理解を深めることと拠点施設の活用を目的としたアートワークショップ（AWS）の開催内容と、その効果について報告を行う。

AWSは、はりまデザインラボ、東はりま特別支援、県立播磨南高校の連携によって企画され、運営が行われている。アート創作活動には、東はりま特別支援高等部の生徒と、南高校芸術類型の生徒が参加し、共同して作品の制作を行った。

このAWSの取り組みを通じて、以下の3点が明らかになった。(1)AWSが、はりまデザインラボ、東はりま特別支援、南高校の連携に拠って企画運営され、知的障がいのある生徒と地域の人との相互理解を深めるきっかけとなっていること。(2)東はりま特別支援生徒と南高校生徒が協力して絵を描くことで、知識だけの理解ではない相互理解が得られたこと。教諭の評価も高く、AWSの効果があると捉えられており、継続実施が期待されていること。(3)AWSは交流施設で開催され、作品完成後の展示も行われていること。創作活動から展示まで行える拠点の存在が播磨町の取り組みの特徴となっていること。

#### Summary

This report aims to clarify the process and effects of Art Workshop (AWS), which aimed to achieve mutual understanding between various communities and utilize local exchange facility on community development activities led by local residents. AWS was planned and operated by Harima Design Lab. (HDL), East Harima Special Needs School (EHSNS) and Harima South High School (HSHS). Student of EHSNS and HSHS participate the art creative activity, and produced the work by cooperating.

Through AWS, the following three points are obtained. 1) AWS has been planned by HDL, EHSNS and HSHS, and provided chances of deeper mutual understanding between handicapped student and local resident. 2) Through the cooperative activities, student of EHSNS and HSHS achieved mutual understanding. And teachers evaluated the activities high and hoped continue acting. 3) AWS and the exhibition after the AWS were hold at local exchange facility. One of features of this community development activity is existence of such foothold.

1.はじめに

1-1.研究の背景と目的

近年まちづくりの分野において、多主体が連携し、協働することが前提となってきた。多主体には、行政、民間企業、地権者、地域住民、専門家などが多く挙げられる。しかし、多主体が協働する際のきっかけや、協働の方法が不明な場合が多く、特に地域住民同士に代表される多主体が連携・協働する際のきっかけと方法が不明な場合が多い。また、まちづくり活動の拠点をもつことも重要であり、拠点施設の活用についての課題も多い。

そこで本研究は、身近な生活環境における地域住民主体のまちづくりにおいて、多様な立場の地域住民が連携・協働するための相互理解を深めることと拠点施設の活用を目的としたアートワークショップの開催内容と、その効果について報告を行う。

1-2.研究の方法

本研究では兵庫県播磨町（以下：播磨町）で取り組まれている地域活動を事例として採り上げる（図1）。この地域活動は、住民主導のまちづくり組織（はりまデザインラボ、以下HDL）が中核となり、県立特別支援学校や他団体と協働体制を築き、多様な活動を行っているものである<sup>i</sup>。本研究では、2010年度にHDLによって実施された（アートワークショップ、以下AWS）を題材として、

AWSの企画から実施までの資料整理と、AWS参加者へのアンケート調査を通じて考察を行った。



図1.播磨町の位置

2.AWSの全体構成

2-1.AWS実施の目的と実施体制（図2）

AWSは2009年度から開催されており、県立東はりま特別支援学校（東はりま特別支援）の生徒と地域の人の共同によるアート創作活動を行い、相互交流や相互理解の促進を目的として行われている<sup>ii</sup>。AWSはHDL、東はり

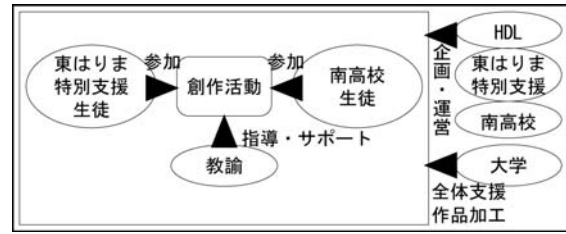


図2.AWSの実施体制

ま特別支援、県立播磨南高校（南高校）の連携によって企画され、運営が行われている。創作活動には、東はりま特別支援高等部の生徒と、南高校芸術類型の生徒（1年生）が参加し、共同して作品の制作を行った。また、全体的な支援と完成した作品の他の形態への加工を本学が担当した。

2-2.共同による創作活動の実施方法

2009年度のAWSは初めての開催で、東はりま特別支援の生徒の反応が予測困難であったため、段階別の別作業とした。しかし、問題が起きる可能性が無いことが確認され、同一作業が出来ないことによる南高校生徒の物足りなさもあったことから、2010年度は両校生徒混合の少人数グループによる共同作業を行うこととした。

3.2010年度のAWSの取組み

3-1.作業の段階区分と創作作品（図3、図4）

2010年度では、創作する作品を立体作品とし、約35cm四方の立方体5つにテーマに応じた絵を描くことを想定した。この立方体は、完成後椅子等として使用することを考えた。立方体は5mm厚の合板を用い、合板の切断等を本学が担当し（下準備1）、合板への下地塗装を南高校が担当（下準備2）した。そして、合板組み立て前の状態で東はりま特別支援と南高校の生徒共同の描画作業を行い（創作1）、描画後の保護塗装と組み立てを南高校生徒が行う（創作2）段階区分とした。5つのテーマを「はな」「ひと」「線路」「動物」「マル」とした。

3-2.創作当日（図5、図6）と完成作品（図7）

2010年8月9日と10日に交流施設<sup>iii</sup>を会場に、東はりま特別支援の生徒12名と南高校の生徒12名による描画作業が行われた。この他HDL関係者5名と教諭8名が参加した。東はりま特別支援の生徒が集中して作業できる

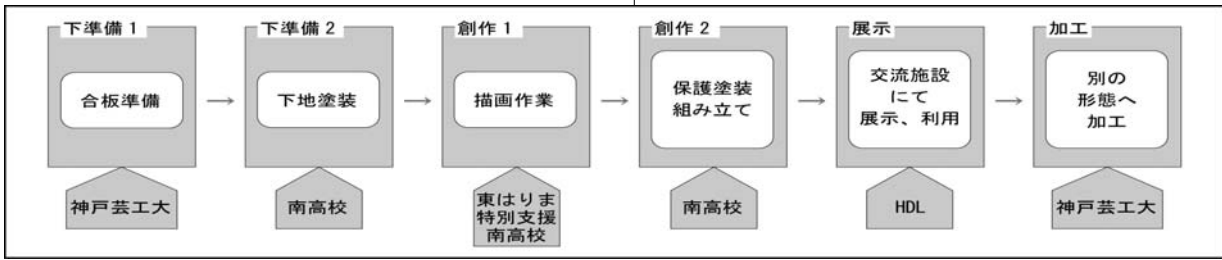


図 3.2010 年度 AWS の段階区分と作業の流れ



図 4.下準備終了後の合板



図 5.共同描画作業の様子



図 8.展示の様子



図 9.ポストカード（一部）



図 6.仮組み立ての様子



図 7.完成した作品（はな）

時間が約1時間程度であることから、作業を2日間に分け、初日は線画を描くこと、2日目は着色作業を中心とした。作業中は、東はりま特別支援の生徒は描画作業に熱中し、南高校の生徒はその勢いに気圧されながらも、コミュニケーションを取りながら描画を行っていた。

描画終了後の8月末に、南高校で合板への保護塗装と組み立てが行われた。特別支援学校の生徒らしい、鮮やかな作品が完成した。

### 3-3.作品完成後の取組み（図8、図9）

完成後の作品は交流施設に搬入され、展示と同時に椅子としても利用されている。また、創作した作品が立方体5つであり、参加した生徒の手元に保管できないため、ポストカードを制作することとした。5枚セットとなったポストカードは、参加した生徒や学校関係者をはじめ、多くの関係者へ配布されている。

### 4.AWSによる相互理解の変化についての調査

AWSをきっかけとした参加者の相互理解について、東はりま特別支援生徒、教諭、南高校生徒の三者に対しアンケート調査を行ったiv。アンケート調査の項目の構成

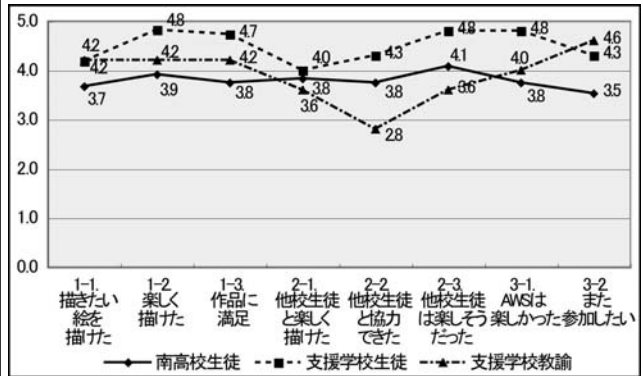


図 10.三者共通アンケート項目の結果

は、(i)AWSで絵を描いたこと、(ii)他校の生徒との交流、(iii)他校の生徒と一緒に取り組んだAWS全体、(iv)他校の生徒に対する意識についての4項目とした。(i)から(iii)は三者共通の5段階評価の設問とし、(iv)はAWSの効果と支援学校生徒に対する意識についての南高校生徒と教諭への個別設問とした。

### 4-1.アンケート調査（共通項目）結果（図10）

三者共通の設問（5段階）の結果として、全体的にAWSを楽しみ、満足している様子がうかがえる。また、全ての質問について南高校生徒よりも東はりま特別支援生徒で高い評価が出ており、AWSに満足し、楽しんだことがわかる。両者とも、描画することを楽しみ、満足していることがわかる。

教諭側の評価では、他校の生徒との協力について比較的低い評価が出ているが、「3-2.また参加したい」が最も高い評価となっており、AWSの効果が高く評価している

表 1.南高校生徒への個別設問結果

4-1. かつて身近に知的障害児がいたか	4-2. どう感じていたか	4-3. 初めて触れ合ったか	4-4. イメージが変わったか	4-5. どう変化したか					
a. 学校にいた	14	a. 変わった人	2	a. はじめてだった	6	a. 変わった	5	a. 良いイメージに変わった	1
b. 近所にいた	2	b. 怖い	0	b. 以前にもある	6	b. 変わらなかった	7	b. 怖くなかった	0
c. いなかった	3	c. 優れた能力を持つ人	2					c. 優れた能力をもつと思った	1
		d. 自分とは異なる人	2					d. 自分とあまり変わらない人	1
		e. 普通の人と同じ	9					e. 普通の人と同じだ	3
		f. その他	2					f. その他	1

と考えられる。

4-2. アンケート調査（個別項目）結果

南高校生徒への個別設問の結果を表 1 に示す。ここでは支援学校の生徒に対する意識と AWS による変化について調査を行った。知的障がいのある生徒に対する先入観も無く、むしろ個性をしっかりと把握していることが明らかになった。また、AWS による意識変化も見られ、創作活動を通じて良いイメージへ変わったり、優れた能力を持つという認識が生まれている。

教諭への個別設問の結果を表 2 と図 11 に示す。他校の生徒（南高校）との交流については、重要性和効果を認識しており、AWS の意義と効果を高く評価していると言える。また、支援学校の生徒が楽しむことで教育効果も得られると捉えているようである。

5. まとめ

(1) AWS の内容と実施体制：アート創作活動（AWS）は HDL が企画し、東はりま特別支援と南高校が連携・参加し、両校生徒の協力により制作された。AWS は、特別支援学校に通う知的障がいのある生徒と地域の人との相互理解を深めるきっかけとして行われている。

(2) AWS の効果：共同制作を行うことで、言葉だけではないコミュニケーションが生まれた。東はりま特別支援生徒と南高校生徒の間でも、協力して絵を描くことで、知識だけの理解ではない相互理解が得られた。教諭の評価も高く、AWS の効果が明確にあると捉えられており、実施継続が期待されている。

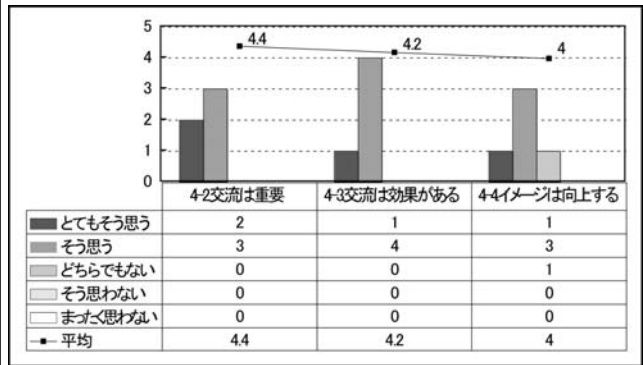


図 11.教諭への個別設問結果（1）

表 2. 教諭への個別設問結果（2）

4-1. コラボアートは初めて	4-5. 重要なこと（複数回答）
a. はい（初めて）	2 a. 支援学校・生徒に対する理解の向上
b. いいえ（以前にも類似の機会があった）	2 b. 生徒が楽しむこと
	c. 生徒が一般の人と交流すること
	d. より多くの人が参加すること
	e. 一般の人が楽しむこと
	f. 制作物をつくること
	g. その他

(3)交流施設の活用：AWSは交流施設で開催され、作品完成後の展示も行われている。創作活動から展示まで行える拠点の存在が播磨町の取組みの特徴となっている。

謝辞 AWS を実施するにあたり、本学クラブ・美術学科の安森弘昌准教授の助言と、技術職員（当時）の依藤健一氏の多大な協力を得ました。記して謝意を表します。

【参考文献】

- 1) 倉知徹、「住民主導のまちづくり組織による協働のプロセスデザイン-兵庫県播磨町での施設運営の取り組みを通じて-」、『芸術工学 2009』、<http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/report/23-01.html>
- 2) 倉知徹他、「公立学校と住民主導まちづくり組織が協働するプロセスデザインの研究／兵庫県播磨町での取り組みを通して」、『芸術工学 2010』、[http://kiyou.kobe-du.ac.jp/wp-content/uploads/2010/11/23\\_kurachi.pdf](http://kiyou.kobe-du.ac.jp/wp-content/uploads/2010/11/23_kurachi.pdf)

【補注】

- i HDL は「旧播磨北小学校施設運営協議会」を前身としており、その設立経緯等は文献 1) に詳しい。
- ii 2009 年度の AWS については、文献 2) に詳しい。
- iii 県立東はりま特別支援学校内にある地域連携交流施設。HDL が管理運営を行っている。
- iv アンケート調査：2011 年 2 月 22 日に南高校、2 月 25 日に特別支援学校で実施。南高校生徒は参加者 12 名と欠席者 5 名、東はりま特別支援生徒 11 名、教諭 5 名から回答を得られた。